

私語に対する規範意識・集団規範の認知と頻度の関連

公的・私的自意識および座席位置に着目して

出口拓彦

藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科

本研究は、私語に対する規範意識・集団規範に対する認知とその頻度の関連について、行為者の公的・私的自意識に注目して検討することを目的とした。東海地方・北海道における 2 大学の学生 324 名（男子 95 名、女子 217 名、不明 12 名）を対象に質問紙調査を行った。得られた回答を基に、公的・私的自意識を独立変数、私語の頻度を従属変数とした分散分析を行った結果、「授業に関する私語」「授業と無関係の私語」とともに、有意な主効果・交互作用は見いだされなかった。また、公的・私的自意識それぞれの平均値を基準に調査対象者を 4 分し、群ごとに規範意識・集団規範の認知と、私語の頻度との積率相関係数を算出した。その結果、「授業に関する私語」の頻度については、私的自意識が高い群のみに、規範意識と頻度の有意な負の相関が示された。集団規範の認知と頻度の間には、有意な相関は示されなかった。一方、「授業と無関係の私語」については、規範意識と頻度の全ての組み合わせに有意な負の相関が示された。集団規範の認知と頻度の間には、公的・私的自意識ともに低い群だけに弱い相関が示された。さらに、座席位置を独立変数、私語の頻度を従属変数とした分散分析を行った。その結果、後ろの方の学生は、「授業と無関係の私語」の頻度が比較的高い傾向が示された。また、縦の座席位置ごとに、規範意識・集団規範の認知と頻度との積率相関係数を算出した。その結果、後ろの方の学生には、「授業に関する私語」に対する規範意識と頻度の間には有意な相関が示されないが、前の方・真ん中の学生には示されるなど、座席位置によって異なった相関のパターンが見られた。

1. 問題

授業中に発生する私語は、初等・中等教育のみならず、高等教育においても大きな問題となっている (e.g. 家本, 1990¹⁾; 島田, 1999²⁾; 新堀, 1992³⁾).

島田(2002)⁴⁾は、大学・短大・看護学校の学生を対象に、私語に関する質問紙調査を行っている。その中で、「私語はしたことがない」と回答した者は 4.7% にとどまり、「ほとんどの講義でしている」(12.3%)、「かなりの講義でしている」(20.3%)、「いくつかの講義でしている」(62.7%)と、多くの学生が私語をしていることを報告している。また、同じく島田(2002)は、大学・短大の教師を対象に質問紙調査を行っている。その結果、「自分の講義で私語が発生しているか」という問いに対して、「全く発生していない」と回答した者は 16.7%であり、61.6%の教師が「一部の講義で発生」と回答し、「全部の講義で発生」という回答も 21.8%に及んでいることが示された。なぜ

このように私語が頻繁に発生するのであろうか。

小牧・岩淵(1997)⁵⁾は、59.0%の学生が、私語に対して“絶対してはいけない”という規範意識を持っているにもかかわらず、84.9%の人が“ついしてしまう”と回答していることを報告している。また、ト部・佐々木(1999)⁶⁾は、私語に対して否定的な私的見解を生徒は持っているが、学級の集団規範に比べて“偽悪的”にふるまい、私語をしている可能性について指摘している。

これらの研究から、個々の学生は私語を「してはいけないことだ」と考えているにもかかわらず、実際には授業中に私語をしている、という状況があることが推測される。

このような問題に対して、出口・吉田(印刷中)⁷⁾は、「大学生活への適応」という観点から私語の発生過程について検討し、規範意識を有している学生であっても、「対人関係の構築」を大学生活の目的としている者は、必ずしも私語を抑制するとは限らない

傾向を報告している。さらに、私語をしている学生は、比較的適応感が高い傾向も報告している。

また、Feningstein, Scheier, & Buss(1975)⁹⁾は、自意識を私的自意識・公的自意識の2つに分類しているが、私的自意識が高い人は、態度の一貫性が高いことが報告されている(Scheier, 1980)⁹⁾。このことから、私語に対する規範意識が肯定的である(私語を「してはいけないこと」と考えている)ことが、その抑制に結びつくためには、学生の私的自意識が高いことが重要となると推測される。さらに、Feningstein(1979)¹⁰⁾は、公的自意識の高い人は、他者からの拒絶に対して敏感になることを報告している。このことから、公的自意識の高い人は、周囲の学生の学習活動を妨げる可能性のある私語を抑制する可能性が考えられる。

以上のことから、本研究では、私語の規定因に関する基礎的研究として、規範意識・集団規範の認知とその頻度との関連について、行為者の公的・私的自意識に注目して検討することを目的とした。

なお、島田(2002)は、私語の発生を未然に防ぐ方法として、26.5%の教師が「座席に関するもの」を回答し、学生側も、「私語をなくすための要望」として21.5%の者が「座席配置の工夫」をあげたことを報告している。このため本研究においては、教室における座席位置と私語との関連についても、併せて取り上げることとした。

2. 方法

2.1 調査対象者および時期

東海地方・北海道における2大学の学生324名(男子95名、女子217名、不明12名、平均年齢19.76歳、 $SD = 0.88$)。調査時期は2004年12月～2005年1月。

2.2 測定された変数

1) 私語に対する規範意識 島田(1999)、卜部・佐々木(1999)を基に作成された、出口・吉田(印刷中)の尺度を使用した。この尺度は、授業に関する私語(e.g. 「授業の内容に関する疑問点について話した」「板書でよく読めないところについて話した」)、授業と無関係の私語(e.g. 「授業には関係のない冗談や笑い話をした」「授業の内容には関係のない世間話をした」)の2つの下位尺度からなる、計9つの質問項目で構成されている。

これらの項目について、「あなたは、以下のことを『良いことだ』と思いますか。それとも『まずいことだ』と思いますか」と質問し、5段階評定で回答を求めた。

2) 集団規範の認知 朴・出口・吉田(2004)¹¹⁾や卜部・佐々木(1999)を参考に、前述の「規範意識」と同様の質問項目について、「周囲の人たちは、以下のことを『良いことだ』と思うでしょうか。それとも『まずいことだ』と思うでしょうか」と質問し、5段階評定で回答を求めた。

3) 私語の頻度 出口・吉田(印刷中)による尺度を使用した。この尺度は、「私語に対する規範意識」に関する9つの質問項目の語尾を、「話すこと→話した」「話をする→話をした」などと、それぞれ変更して作成されている。

これらの項目に対して、「たくさんしたーかなりしたーどちらともいえないーあまりしなかったーぜんぜんしなかった」の5段階評定で回答を求めた。

4) 公的・私的自意識 菅原(1984)¹²⁾による自意識尺度21項目を使用した。公的自意識は、「人にみられていると、つかつかうをつけてしまう」「他人からの評価を考えながら行動する」といった計11項目で構成されている。一方、私的自意識は、「自分を反省してみることが多い」「気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取る方だ」といった計10項目からなっている。

これらの項目に対して、「7:非常にあてはまる」から「1:全くあてはまらない」の7段階評定で、それぞれ回答を求めた。

5) 座席位置 教室内の座席位置について、「いままでの授業を通して、一番多かった場所」を回答するように求めた。回答は、教室内での前後および左右の座席位置について求めた。まず、「教師の前の方ー教室の真ん中あたりー教室の後ろの方」の中から1つ選択するよう求めた(以下「縦の座席位置」と記す)。次に、「教室の窓側ー教室の真ん中あたりー教室の廊下側」の中から回答を求めた(以下「横の座席位置」と記す)。

2.3 手続き

講義時間中に集団で実施した。回答は匿名で行われた。質問紙には、出口・吉田(印刷中)を基に、「ここでの『私語』とは、授業内容に関係する・しないに関わらず、『授業中に、学生同士で行う私的な発言』のことをいいます。(ただし、先生が許可した

場合の発言は除きます。)」という教示文を記した。さらに、質問紙に回答した日の授業における私語だけについて回答するのではなく、今までの授業を通しての私語について回答するように求めた。

また、各尺度は、「公的・私的自意識」「私語の頻度」「規範意識」「集団規範に対する認知」という順で配置した。なお、測定は、50人以上の履修者がいる比較的多数の授業において行われた。

3. 結果

3.1 指標の算出

1) 規範意識・集団規範の認知および私語の頻度 因子分析(最小2乗法,プロマックス回転)を行い,固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から2因子解を選択した(因子間相関.36~.48)。第1因子は「授業や勉強とは関係のない用事について話した」「授業には関係のない冗談や笑い話をした」などの項目から構成され,「授業と無関係の私語」と命名された。一方,第2因子は「授業の内容に関する疑問点について話した」「先生の話で聞き逃したことについて話した」などの項目から構成され,「授業に関する私語」と命名した。このような因子分析結果は,出口・吉田(印刷中)とほぼ同様のものであった。

次に,第1因子・第2因子ともに負荷量が.50未満の1項目(「授業に対する不満について話した」)を除外し,因子ごとに α 係数を算出した。その結果, $\alpha=.80\sim.93$ の範囲であり,高い内的整合性が示された。このため,因子ごとに得点を合計し,これを指標とした。

なお,合計点は項目数で除算した(本指標の理論上の範囲は1.00~5.00)。また,規範意識および集団規範の認知の指標については,高い値であるほど,私語に対して否定的であることを示している。

2) 公的・私的自意識 公的・私的自意識ごとに α 係数を算出した。その結果,公的自意識は $\alpha=.89$,私的自意識は $\alpha=.84$ であり,高い内的整合性が示された。このため,各項目に対する回答を合計し,指標とした。なお,下位尺度を構成する項目数が異なることもあり,合計点は項目数で除算した(本指標の理論上の範囲は1.00~7.00)。

3) 座席位置 縦の座席位置(前の方-真ん中-後の方)・横の座席位置(窓側-真ん中-廊下側)への回答をそのまま指標とした。

3.2 各指標間の関連

1) 公的・私的自意識の影響 公的・私的自意識それぞれの平均値を基準に,「低-低」「低-高」「高-低」「高-高」群に調査対象者を4分した。公的自意識の平均値(標準偏差)は,5.11(0.98),私的自意識は5.04(0.87)であった。そして,公的自意識・私的自意識を独立変数とした,従属変数を私語の頻度とした 2×2 の対応のない分散分析を行った(Table 1)。各群の n は44~104の間であった。

その結果,「授業に関する私語」「授業と無関係の私語」とともに,公的・私的自意識の有意な主効果・交互作用は見いだされなかった。

Table 1 公的自意識・私的自意識と私語の頻度の分散分析結果

公的自意識	私的自意識	授業に関する私語	授業と無関係の私語
低	低	2.68 (0.89)	2.84 (1.07)
	高	2.71 (0.86)	2.86 (1.14)
高	低	2.81 (0.81)	2.83 (0.93)
	高	2.91 (0.86)	2.89 (1.12)
公的自意識の主効果		$F=2.51$	$F=0.00$
私的自意識の主効果		$F=0.39$	$F=0.09$
交互作用効果		$F=0.10$	$F=0.02$

2) 規範意識・集団意識の認知と私語の頻度との関連に公的・私的自意識が及ぼす影響 公的・私的自意識それぞれの平均値を基準に,調査対象者を4分した。そして,Scheier(1980)を参考に,群ごとに規範意識・集団規範の認知と,私語の頻度との積率相関係数を算出した(Table 2)。

Table 2 公的自意識・私的自意識別の規範意識・集団規範の認知と私語の頻度との積率相関係数

	私的自意識	授業に関する私語		授業と無関係の私語	
		低	高	低	高
規範意識	低	-.12	-.14	-.58**	-.30*
	高	-.31*	-.28**	-.33*	-.47**
集団規範の認知	低	.07	-.19	-.26**	.12
	高	-.22	-.11	-.11	-.11

** $p < .01$, * $p < .05$

その結果,「授業に関する私語」の頻度については,私的自意識が高い群のみに,規範意識と頻度の有意な相関が示された。集団規範の認知と頻度の間には,有意な相関は示されなかった。一方,「授業と無関係の私語」については,規範意識と頻度の全ての組み合わせに有意な負の相関が示された。また,集団規

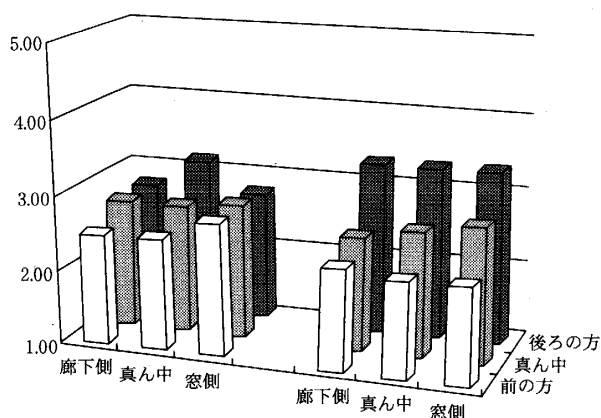
範の認知と頻度の間には、公的・私的自意識共に低い群だけに、 $r=-.26(p<.01)$ と弱い相関ではあるが、有意な関連が示された。

3) 座席位置の影響 独立変数を縦の座席位置(前の方-真ん中あたり-後ろの方)・横の座席位置(窓側-真ん中あたり-廊下側), 従属変数を私語の頻度とした 3×3 の分散分析を行った(Table 3, Figure 1)。各群の n は 23~52 の間であった。

Table 3 座席位置と私語の頻度の分散分析結果

横の位置	縦の位置	授業に関する私語	授業と無関係の私語
窓側	前の方	2.79 (0.93)	2.29 (0.93)
	真ん中	2.82 (0.92)	2.82 (0.85)
	後ろの方	2.74 (0.79)	3.36 (1.03)
真ん中	前の方	2.52 (1.00)	2.27 (0.98)
	真ん中	2.73 (0.84)	2.68 (0.97)
	後ろの方	3.15 (0.78)	3.32 (1.02)
廊下側	前の方	2.48 (1.05)	2.35 (1.06)
	真ん中	2.72 (0.76)	2.53 (0.83)
	後ろの方	2.77 (0.68)	3.30 (1.04)
横の位置の主効果		$F=0.92$	$F=0.25$
縦の位置の主効果		$F=2.78$	$F=29.04^{**}$
交互作用効果		$F=1.58$	$F=0.29$

** $p<.01$



※左:授業に関する私語, 右:授業と無関係の私語

Figure 1 座席位置別の私語の頻度

その結果、「授業に関する私語」については、座席位置の有意な主効果・交互作用効果は示されなかった。一方、「授業と無関係の私語」については、縦の座席位置の主効果が示され($p<.01$), 後ろの方の学生は、私語の頻度が高い傾向が示された。しかし、横の座席位置の主効果や、横×縦の交互作用効果は示

されなかった。

さらに、座席位置と規範意識・集団規範の認知との関連について検討するために、規範関連の変数を従属変数とした分析も実施した(Table 4-1, Table 4-2)。

Table 4-1 座席位置と規範意識・集団規範の認知の分散分析結果(授業に関する私語)

横の位置	縦の位置	個人規範	集団規範の認知
窓側	前の方	2.07 (0.75)	2.45 (0.67)
	真ん中	2.08 (0.68)	2.48 (0.99)
	後ろの方	1.87 (0.74)	2.03 (1.03)
真ん中	前の方	2.15 (0.62)	2.20 (0.94)
	真ん中	2.07 (0.65)	2.13 (0.86)
	後ろの方	1.84 (0.60)	2.16 (0.91)
廊下側	前の方	2.04 (0.87)	2.22 (0.98)
	真ん中	1.89 (0.62)	1.95 (0.73)
	後ろの方	1.90 (0.73)	2.14 (1.16)
横の位置の主効果		$F=0.37$	$F=1.38$
縦の位置の主効果		$F=2.61$	$F=0.88$
交互作用効果		$F=0.44$	$F=1.25$

Table 4-2 座席位置と規範意識・集団規範の認知の分散分析結果(授業と無関係の私語)

横の位置	縦の位置	個人規範	集団規範の認知
窓側	前の方	3.98 (1.01)	4.13 (0.91)
	真ん中	3.80 (0.90)	3.87 (0.95)
	後ろの方	3.72 (0.94)	3.65 (1.13)
真ん中	前の方	4.41 (0.67)	3.60 (1.32)
	真ん中	3.94 (0.89)	3.74 (1.18)
	後ろの方	3.93 (0.94)	3.80 (0.95)
廊下側	前の方	4.20 (0.94)	3.87 (1.13)
	真ん中	4.27 (0.64)	3.97 (0.90)
	後ろの方	3.66 (0.98)	3.76 (1.11)
横の位置の主効果		$F=2.23$	$F=0.74$
縦の位置の主効果		$F=5.69^{**}$	$F=0.53$
交互作用効果		$F=1.57$	$F=0.89$

** $p<.01$

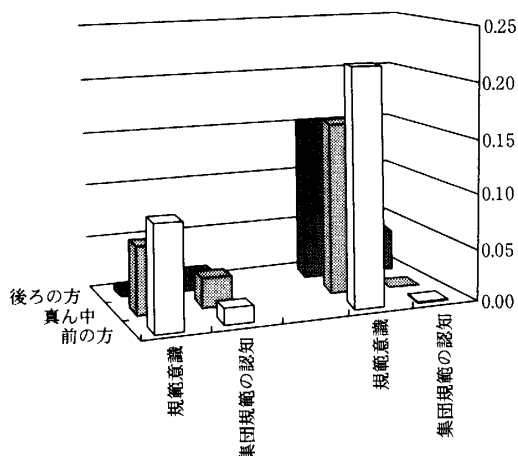
その結果、「授業に関する私語」に対する規範意識および集団規範への認知については、座席位置の有意な主効果・交互作用効果ともに示されなかった。一方、「授業と無関係の私語」に対する規範意識については、縦の座席位置の主効果が示され($p<.01$), 後ろの方の学生は、規範意識が否定的である傾向が示された。集団規範の認知については、有意な主効果・交互作用効果は示されなかった。

これらの結果から、「縦の座席位置」が、私語の頻度や規範意識に対して影響を及ぼしている可能性が示された。このため、縦の座席位置の影響についてより詳細に検討することを目的として、公的・私的自己意識に関する分析と同様に、縦の座席位置ごとに、規範意識・集団規範の認知と頻度との積率相関係数を算出した(Table 5)。なお、積率相関係数の自乗についても併せて算出した(Figure 2)。

Table 5 縦の座席位置別の規範意識・集団規範の認知と私語の頻度との積率相関係数

座席位置	授業に関する私語		授業と無関係の私語	
	規範意識	集団規範の認知	規範意識	集団規範の認知
前の方	-.31**	-.12	-.47**	-.04
真ん中	-.25*	-.16	-.40**	-.01
後ろの方	-.07	-.12	-.39**	-.20**

** $p < .01$, * $p < .05$



※左: 授業に関する私語, 右: 授業と無関係の私語

Figure 2 縦の座席位置別の規範意識・集団規範の認知と私語の頻度の r 自乗

その結果、「授業に関する私語」については、前の方・真ん中に座っている学生は、規範意識と頻度との間に有意な負の相関が示されたが(順に、 $r = -.31$, $r = -.25$)、後ろの方に座っている学生には、有意な相関は示されなかった。また、集団規範の認知と頻度の間には、いずれの座席位置においても、有意な相関は示されなかった。

一方、「授業と無関係の私語」については、規範意識と頻度の間には、全ての座席位置において、有意な負の相関が示された。また、集団規範への認知と頻度の間に関しては、後ろの方に座っている学生には、有意な負の相関が示されたが($r = -.20$)、真ん

中・前の方に座っている学生には、有意な相関は示されなかった。

4. 考察

本研究では、私的自意識が高い者は、公的自意識の高低にかかわらず、規範意識と「授業に関する私語」の頻度に関連がある傾向が示された。Scheier(1980)は、私的自意識が高く公的自意識は低い群のみに態度の一貫性を見いだしているが、本研究では、公的・私的自意識共に高い群においても、有意な相関が示された。つまり、授業に関する私語に関しては、公的自意識が強いことが、自己の規範意識を行動へ反映されることを必ずしも抑制するとは限らない可能性が示唆された。また、私語の頻度に対する公的・私的自意識の直接的な影響は示されず、社会的迷惑行為と公的・私的自意識との関連について検討した出口(2004)¹³⁾と同様の結果となった。これは、私語という行為が、社会的迷惑行為という側面を有したものであること(出口・吉田, 印刷中)を反映したためではないかと推測される。

また、縦の座席位置が、規範意識や私語の頻度、規範意識と頻度の関連といった、様々な事項に対して影響を及ぼしている可能性も示唆された。さらに、後ろの方に座っている学生は、「授業に関する私語」に対する規範意識と私語の頻度との間に、有意な相関が示されなかった。このことは、自分が持っている私語に対する規範が私語の発生を規定し得ない可能性を示唆するものであり、私語の発生過程を検討する上で重要な事項であると思われる。規範意識と私語の頻度の相関が示されなかった一因として、後ろの方の席は、板書や教師の発言を聞くことが比較的困難になり、結果として自分の規範意識にかかわらず、この種の私語をしたのではないかということが考えられる。また、板書や教師の発言について、一緒に授業を受けている他の学生から質問され、これに応答した(私語をした)可能性もあると思われる。

今後は、教室内の座席位置、特に縦の座席位置がどのような心理的な効力を有しているのかについても検討していく必要があるだろう。これについては、例えば、Froming, Walker, & Lopyan(1982)¹⁴⁾は、評価的な観察者の存在が公的な自己覚知を活性化することを報告している。本研究は、大学における私語について扱ったが、教師が「評価的な観察者」とな

り、教室の前の方に座った学生の公的な自己覚知を高めた可能性も考えられよう。

なお、本研究は相関的研究であり、取り上げられた変数間の関連については、逆因果の可能性も考慮する必要がある。例えば、座席位置については、「前の方に座ると私語を頻繁にする」という因果関係のみならず、「私語を頻繁にする学生は、前の方に座る」という因果関係が存在する可能性もある。特に、規範意識については、「規範意識が肯定的である学生は前の方に座り、低い者は後ろの方に座る」という因果関係の存在は十分に考えられることであろう。本研究で扱われている「私語」は、評価的な側面を含む事項であり、実験的研究を行う際には十分な配慮を要すると思われるが、座席位置を操作して私語の発生頻度を測定するなど、相関的研究以外の方法も用いて、私語の発生過程について検討していくことも重要であろう。

引用・参考文献

- 1) 家本芳郎 (1990). 私語・おしゃべりの教育学: 私語は指導の出発点 学事出版
- 2) 島田博司 (1999). 私語の誘惑と人間関係 六甲出版
- 3) 新堀通也 (1992). 私語研究序説: 現代教育への警鐘 玉川大学出版部
- 4) 島田博司 (2002). 私語への教育指導: 大学授業の生態誌 2 玉川大学出版部
- 5) 小牧一裕・岩淵千明 (1997). 授業規範: 反規範行為における意識構造 日本心理学会第 61 回大会発表論文集, 381.
- 6) ト部敬康・佐々木薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究: リターン・ポテンシャル・モデルの適用 教育心理学研究, 47, 283-292.
- 7) 出口拓彦・吉田俊和 (印刷中). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連: 大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究.
- 8) Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 9) Scheier, M.F. (1980). Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 514-521.
- 10) Fenigstein, A. (1979). Self-consciousness, self-attention, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 75-86.
- 11) 朴 賢晶・出口拓彦・吉田俊和 (2004). 個人規範および集団規範に対する意識が個人の行動に及ぼす影響 教育心理学フォーラムレポート, FR-2004-003.
- 12) 菅原健介 (1984). 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 13) 出口拓彦 (2004). 社会的迷惑行為に対する認知と頻度の関連: 公的・私的自意識および社会・個人志向性に着目して 藤女子大学紀要(第II部), 42, 59-64.
- 14) Froming, W. J., Walker, G. R., & Lopyan, K. J. (1982). Public and private self-awareness: when personal attitude conflict with social expectations. *Journal of Experimental Social Psychology*, 18, 476-487.

【謝辞】

本研究を実施するにあたって、貴重なご助言をいただきました名古屋大学大学院教育発達科学研究科下木戸隆司氏や、調査にご協力いただきました先生方、学生の皆様に深く感謝いたします。